
フジテレビレジェンド ～立ち向かえ！戦士達よ希望を賭けた戦い～

鶴久保ゆうすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フジテレビレジェンド
　　＼立ち向かえ！戦士達よ希望を賭けた戦い＼

【Nコード】

N1591S

【作者名】

鶴久保ゆーすけ

【あらすじ】

謎の男たちによりフジテレビが占拠された！なかにはたくさんの芸能人たちがいて人質にされた。この事態を乗り越えようと芸能人たちは男たちと戦うことにするがその結末は・・・俺たちはファンや愛する人のためにも負けるわけにはいかないんだ！。これは芸能人たちと男たちの壮絶な戦いの物語。

占領されたフジテレビ（前書き）

感想書いただけたらなと思いますーす！

占領されたフジテレビ

お台場・フジテレビ前

「ああ、フジテレビの前だ」

男が誰かと電話をしていた

「仕事で別の局の芸能人もきていると思うから、そうとうな数の人質かもな」

男は笑いながら言った。

「それじゃ行ってくるからよ」

男は携帯電話をポケットへなおし、フジテレビへ向かった。

そのころフジテレビでは

「お疲れ様です」

「はい、お疲れさん」

たくさんの芸能人が仕事をしていて、別の局からきていた人もいた。

楽屋

「やっぱりな、NONSTYLEの井上さ、あんなナルシストやから周りから引かれんねん」

「相手の石田が注意せんもんなあ」

ダウンタウンの浜田と松本が何やらトークしている。

「ダウンタウンさん、おはようございますー」

その時、NONSTYLEが挨拶にきた。

「おっ、噂をすれば」

「何がですか？」

「お前ら、トークは上達したんか？」

浜田が石田に聞いた。

「それがなかなか難しいんですわ」

石田が井上の肩を叩いた。

「僕は少しはできますよ」

井上が言った。

「ほおー」

「なんですか、その反応」

ダウンタウンとNONSTYLEが話をしているころ。

男が警備室の前を通ろうとしたときだった。

「あれ、あなた誰の関係者ですか？」

警備員が男に言った。

「見学ですか？一般人ですよね」

男は黙っていた。

「どうなんですか？なん・・・っぐう！」

警備員は男に腹を蹴られてかべにたたき付けられた。

「なっ、何だ・・・」

警備員は気絶した。

「さてと残りも黙らせるか」

男は別の警備員も殴り気絶させた。

「気絶したな、あとは」

男は警備室の電話で誰かと連絡をした。

「他の部隊を送るんだな、そうか」

男は話したあと警備室をでていった。

そのころフジテレビの外では

黒の服をきた男たちが列をつくってフジテレビにはいつていった。

男たちは荷物を抱え、周りはざわついていた。

「なにあの人たち」

「なんかの撮影かしら？」

男たちはフジテレビの1階に入った。

「騒ぐな！おとなしくしろ」

一人の男が鉄パイプを振りまわした。

「おとなしくしてた方が身のためですよ」

もう一人の男が銃をまわりのひとに向けた。

「うおっ！何や」

その場にいた宮川大輔が思わずさげんだ。

「なっ、なんかの撮影か」

ア然とする宮川に男が言った。

「撮影じゃねえ！フジテレビは俺らがのつつた」

宮川はまだぼかーんとしている。

「はぁん、これドツキリやなあ」

宮川は男に近寄った。

「びっくりしたわあ、だってこんなたくさんのエキストラ集めたんやろ」

そのとき一発の空包がなった。

「ふざけてんのか？」

男が宮川をにらんだ。

「すっ、すいません！」

思わずあやまる宮川。

「このフジテレビは俺たちが占拠した！」

男の笑い声がそこらじゅうに響いた。

謎の男たちによって占領されたフジテレビ。

はたして彼らの目的とは

そして次回

男たちに戦いを挑む芸能人たち

占領されたフジテレビ（後書き）

登場させてほしい芸能人がいたらリクエストをかいてもらえたらおもいます

先輩の優しさと想い（前書き）

ちなみに敵の男たちのなかに登場させたいひとがいたら書いてくださーい！できればどんな性格かなども書いてもらえたらなと思います。

先輩の優しさと想い

謎の男たちにより占領されてしまったフジテレビ。

フジテレビにいた芸能人やマネージャー、スタッフなど1000人以上が集められて人質にされた。

「他に人がいないか調べろ」

部下にそう男は言った。

「はいっ」

部下が列をつくり階段を上って行った。

その他の部下たちは鉄パイプや、銃を持ち周りをみわたしている。

「なんやねんな・・・」

宮川がぼそりと言った。

倉庫

「ちょっと何なの!？」

「うわぁ、誰だよあんたら」

倉庫の外から他の芸能人の声がきこえた。

「やばいなあ・・・」

倉庫に隠れてる1人の男。

「ちよっ！何や、はなせよっ」

聞こえてきた声に男がつぶやいた。

「梶・・・」

するとゴソッと何やら音がした。

男は辺りを見た。

「何や・・・」

部屋の隅にあるダンボールのかたまりがガサガサと、動いていた。

「うおっ！」

そこに少し小さな男が立っている。

「お、岡村さん!？」

男は背の低いに人物に向かって言った。

「なんや、西野かあ」

「何やじゃないですよ！」

西野は岡村に言った。

「梶が捕まって・・・俺はこの場所に逃げてきたんですけど」

「梶？あつ、相方か」

「梶と一緒に逃げようって言ったんですけど」

「そんで？」

「梶はお前だけでも逃げろって言って、俺は迷いましたよ！でも・・・」

「この倉庫に逃げてきたってわけやな、梶原はやさしいからなあ」

沈黙が続いた。

「なあっ、西野」

「何ですか？」

「俺らで敵をやっつけへんか」

岡村の言葉に西野は言った

「何言ってるんですか・・・あいつらは武器とか持っていて人質もいるんですよ」

「じゃあ、誰がやつらをたおすねんっ」

「それは・・・」

「俺らでまず様子見に行こうや」

西野は黙っていた。

「うーん・・・分かりました、行きましょう」

西野は岡村を見て言った。

「西野・・・よし、行こか」

西野と岡村はその場所からでていき、廊下側の壁にかくれながら歩いた。

「西野っ、こっから走るで」

「はいっ」

西野と岡村は全力でまがり角まで走った。

「まだ人はいたか？」

男は部下に聞いた。

「はい、今のところ・・・」

「ちゃんと調べてこねえか、ああ！？」

男は部下にどなった。

「ひいっ！ すいません」

ビクッとする部下に男は、フンッと悪態を付く。

「まあ、先輩そんなにおこったらいけませんって」

若い男が少しおちやらけに言った。

「お前は相変わらず呑気だな」

その光景を西野と岡村が見ている。

「あの、えらそうに命令をしてるやつがリーダーやな」

岡村が西野に言った。

「ですね、まずは・・・えっと、どうします?」

「えっ、考えてるところや」

岡村と西野が上の階から見下ろしながら話をしているときだった。

「誰だ！まだいたぞー」

銃を持っている男がさげんだ。

「引っ捕らえろ！逃がすなあ」

リーダーの男が上を向いて言った。

「やばい！西野、逃げるぞ」

「岡村さんだけでも逃げて」

西野が岡村の前に立つ。

「何言うてんねん！こんな時に」

「あなたは大切な先輩ですこんな所で奴らに捕まえさせられる訳にはいきません

力強く西野は岡村に言った

「西野・・・」

「お前ら！俺は強いぞっ、後悔してもしらんでえ！」

西野は前にいる男たちに向かって走った。

「すまん・・・西野」

岡村が後ろを向いて走ろうとしたときだった。

「ーーーーっ！」

何か響いた。

「じっ……銃せ……い」

岡村は西野の方を見た。

「にっ、西野お！」

腕をおさえ呻いている西野がいた。

「岡村さ．．．んっ、あのっ、かすった．．．」

岡村の後ろから別の男たちが駆け付けた。

「岡村っさあん．．．行かないと．．．捕まってしまうす」

「くっそお．．．！」

そのとき1人の男が岡村に向かって走った。

「うわっ！何なん・・・」

岡村のみぞおちを男はなぐった。

「岡村さんっ！」

岡村は地面にドサツとたおれた。

「げほっ・・・ぐあっ」

下の階にいる男たちが人質に向かって言った。

「けっ、ざまあねえな」

リーダーの男が言った。

「ぐっ・・・ちくしょう」

男たちの笑い声がフジテレビじゅうに響く。

それを、人質たちは黙ってきいていた。

岡村と西野は薄い意識のなかで部下の男の声をきいた

「後悔したのはそっちなんじゃないか」

岡村は思った。

あのまま倉庫に隠れて機会をまてば捕まらずにすんだのではないか。

「倉庫に隠れていれば・・・」

ボソッと岡村は言った。

「岡村さん・・・」

後悔する岡村を西野は見ていた。

次回

男たちの要求にあの人物がたち向かう！

先輩の優しさと想い（後書き）

あの大物が登場！？次の話です

負けたくない理由（前書き）

西野さんと岡村さん頑張ってたたかいます！

負けたくない理由

「現在、男たちがフジテレビを占拠して立て籠もっています！それで今の状況はというと・・・」

フジテレビの前にたくさんの報道陣やらマスコミやら野次馬たちが集まっていた

「リーダー！何やら人がたくさん集まっています」

「はあっ！？なんでだ！」

「分かりません！カメラとかなんか・・・いろいろいます！」

「ちくしょう！誰が通報しやがった！！」

リーダーの男が銃を上に向けてならした。

人質たちが騒ぎだした。

「なあ・・・西野」

「何ですか？岡村さん」

西野と岡村は人質の一番後ろの列にいた。

「何かごめんな・・・俺が身勝手な行動したからお前まで捕まっ
てしょうて・・・」

「何言ってんですか、謝るなんて岡村さんらしくないですよ」

「でもケガまでして・・・」

「あっ、これは、かすっただけですから」

はははと笑う西野だが岡村は悲しい気持ちだった。

「それより岡村さん」

「んっ、何や・・・」

「今の奴ら・・・隙があると思いませんか？」

西野は顎で前を示した。

腕と足を縄で縛られているため動きづらい。

「あっ・・・なるほどな」

リーダーの男や部下は人質に対して銃を向けたりしていた。

「なんとか縄をほどかないとな・・・」

「ほどいてどないすんねん」

「ここから逃げるんです」

「何っ！人質がいるのに」

「ただ逃げるだけじゃないですよ」

西野が岡村と背中あわせになって言った。

「別の場所に行って電話するんですよ」

「誰にや？」

西野が器用に岡村の腕を縛っている縄をほどく。

「西野・・・お前」

「もう少しでほどけますから・・・えっと」

岡村の縄をシュルとほどいた。

「岡村さん・・・はい」

「おうっ・・・」

岡村が西野の腕を縛っている縄をほどいていく。

「えっと・・・あれ？」

「岡村さん・・・焦らないでください」

男たちに気づかれないように西野の縄をほどく。

「よし・・・ほどいたで」

岡村と西野は自分の足を縛っている縄をほどく。

「くそっ、なんでこんな固く縛んねん」

「いった・・・岡村さん、こっちはほどきましたよ！手伝いますから」

西野は岡村の足の縄をほどいていく。

「すごいな・・・」

「それ程でも」

西野が得意げに笑う。

「おい、何してんだ」

リーダーの男が人質に向かって言った。

「お前らだよ！こそこそしやがって」

リーダーの男が後ろを指した。

「やばい・・・」

西野が呟き、岡村も縄をほどこうと頑張る。

「聞いてんのか？」

リーダーの男が人質の間を通り、岡村と西野のもとへ向かう。

パ
ラ
ッ

岡村の縄がほどけた。

「岡村さん！これから真っ直ぐ走って」

岡村は西野にいわれた方向へ走る。

その後に西野も続く。

「あっ！こんなにやろう、ふざけんなっ」

男が西野に銃を向ける。

「うおっ！」

西野に向かって何発かはなった。

「うわぁ！怖え」

しかし壁などにあたり西野はすれすれでよけた。

「お前は運が強いな！」

「それはともかく走ってください！」

岡村と西野はスタジオの隅に隠れた。

「はぁっ・・・さてと」

岡村は靴の中から携帯電話をとりだした。

「なんで・・・俺はポケットのなかに携帯いれてたんですけど、なかったから、多分やつらにとられたんだと思いますけど・・・」

「俺、予備としてもう1つもってんねん」

にやりと笑う岡村。

「そうですか・・・って何してるんですかっ!？」

岡村は携帯をいじっていた

「助けを求めんや」

「誰に!？」

岡村は西野の問いにこたえず、電話をした。

「もしもし、岡村ですけどええ、はいっ」

「誰に電話してるんだ・・・岡村さん」

西野が呟いたときだった。

「西野！」

岡村が西野に携帯を渡す。

「えっ！何ですか」

「お前と話したいって」

西野はだまって携帯を受けとった。

「もっ、もしもし・・・」

「おっ、西野か！俺だよ」

その声に西野は驚く。

「えっ！ たっ、たけしさん！？」

「そっち大変らしいな！ 一応、警察に通報したんだけどなあ」

お気楽な声で話す人物。

「フジテレビの前に人がたくさんいるって後輩からな電話があって・
・それで怪しいとおもったから警察に通報したんだよ」

それは北野たけしだった。

「たけしさんが通報したんですね・・・」

「まあな、そっちに助っ人おкуったから!じゃっ」

「あっ！ちよっ・・・たけしさん」

プーッ・・・

「そんな・・・たけしさんがきてくれるんじゃ・・・」

「なんて？」

「なんか助っ人送るらしいですよ」

「なんや・・・それ？」

そのとき肩をガシッと捕まれた。

「うわっ！何や」

西野は掴んだ手をふりほどく。

「えっ・・・！」

岡村が呆然とした。

「あなたはっ!？」

はたして助っ人とは・・・

「やあ！大変そうだなあ」

その人物は萩本欽一だった

「はっ、萩本さん！？」

「うん！そうだけど」

「まさか助っ人って・・・」

西野と岡村が萩本を見た。

「はい！これ、たけちゃんから」

萩本はドサツと大きなバックを置いた。

「うわっ！なんすかこれ」

その中にはたくさんの武器がはいっていた。

「それじゃ俺は行ってくるよ」

「えっ！どこに？」

「敵さんのところにね」

萩本は銃を抱えて走った。

欽ちゃん走りで。

「こんな時にその走り方！」

「西野！追うで」

岡村と西野はバックの中から武器をとった。

「よし！準備は？」

「できました！」

2人は銃を抱え、ほかの武器はポケットのなかにいれたり、背中に
せおったりした。

そして萩本へ向かった方向へ走る。

「萩本さん・・・何考えてるんや」

西野が呟く。

「おい！あれは・・・」

西野と岡村はまがり角の辺りに隠れる。

「萩本さん・・・」

上の階から萩本がリーダーの男に向かって話をしていた。

「あんたらの目的はなんだ」

萩本がリーダーの男に問う

「このフジテレビを俺たちのものにするのだ」

リーダーの男がニヤリと笑った。

「もうそれはできただろうよ！人質を解放しないか」

「それは無理だな、おもしろくねえだろ」

「それじゃ他に要求は？」

「要求？ そうだな・・・」

リーダーの男は人質たちをみわたしながら呟いた。

「人質の中から男が2人逃げたんだ」

「ふーん、それで？」

「その男たちを捕まえてこい」

リーダーの男は萩本をにらみながら言った。

「先ばーい、お金とかは？」

若い男が軽い口調で言った

「ビィラは黙んな、金は後からだ」

ビィラと呼ばれた若い男ははいはいと肩を竦めた。

「さあ！あの男たちを捕まえるんだ」

「いやだね！」

萩本はしらっと言った。

「何だと！おい、あの男を捕まえろ」

リーダーの男が指示をだして部下たちが萩本のもとへ走る。

「やれやれ、力付くかよ」

萩本は銃を軽く乱射した。

「うおっ！」

「ひいっ！」

「ぐうつ！」

部下たちが怯む。

「甘く見るなよ！」

部下が次々と萩本のもとに向かった。

「ぐわっ・・・数が多いな」

そして1人の部下が萩本に蹴りをいれた。

「ぐえっ・・・」

地面に倒れ込む萩本。

「萩本さん！」

西野が萩本の側に行こうとしたときだった。

「あかんて！西野」

「だって萩本さんが！」

「俺らがここで捕まったらたけしさんと萩本さんの協力が無駄になるやろ！」

その言葉に西野が戸惑った

「でもっ・・・ぐっ・・・」

西野と岡村は部下に連れて行かれる萩本の姿をただ、みていた。

「・・・・・・・・西野」

「何ですか・・・」

「俺らであいつらけちらすで」

「岡村さん・・・」

「これ以上あいつらをほっとく訳にはいかん・・・」

「俺らで・・・」

「ああ、そうや・・・」

西野は力強く岡村を見た。

「岡村さん・・・行きましょうか！」

「せやな！西野・・・」

そして2人は走りだした。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお
っ！」

2人の戦士の声が響き渡った。

彼らは戦いをいどんだー

揺るぎない強い意志でー

ただ真っ直ぐにー

次回

西野と岡村の反撃！

負けたくない理由（後書き）

どういう話になるんだろうこのあと・・・

兄の真実と弟の孤独（前書き）

ちなみにリーダーの男と、ビィラと部下は覆面をして声を変えてます！

兄の真実と弟の孤独

仲のいい兄弟がいた。

「お兄ちゃん！」

「ん？何だい」

「今度の休みに行きたい場所があるんだ」

「どこだい？」

「フジテレビ！知ってるよね、お兄ちゃん？」

「えっ・・・」

「お兄ちゃん？」

「あっ・・・親に相談してからな」

「わーい！」

喜ぶ弟だが兄は悲しげな顔をしていた。

「せーんぱい！」

「むっ……んあ？」

リーダーの男は椅子に座っていた。

「ああ……思いだしていたんだ」

「何をですか？」

「ふうん
・
・
・
」

「
・
・
・
・
・
・
昔の事だ
」

ビィラはリーダーの男を見ていた。

「俺らが兄弟だったところですか？」

「なっ・・・！」

リーダーの男がビィラを見た。

人質と部下たちがざわざわとさわいだ。

「この場では俺がリーダーでお前は部下だ！へ、変な事言ってるじゃねえぞ」

リーダーの男は動揺していた。

「それは、すいませんねえ」

ビィラはニヤリと笑う。

その様子を上の階から見ていた西野と岡村。

「どういう事ですか？今の話は」

「分かん・・・でもあいつらは、もしかしたら兄弟かもしれんな・
・」

西野と岡村が話している時に下の階から声がきこえた

「部下にも言っていないですよ？俺たちが兄弟だってこと」

ビィラがリーダーの男に近づく。

「おまっ・・・組織のなかでは先輩と後輩の設定だろうが！」

リーダーの男が叫ぶ。

「そんなに知られたくないんだ・・・俺たちが兄弟だってこと、部下にも周りのやつらにも・・・」

ビィラが悲しげな顔をした

「ビィラ!! さっきからべらべら喋りやがって!」

リーダーの男がビィラに殴り掛かる。

「ビィラじゃない！ちゃんとした名前で言えよ！！」

ビィラがリーダーの男に向かって叫んだ。

リーダーの男は怯んだ。

「ぐっ・・・お前というやつは・・・」

リーダーの男が後ろを向いたときだった。

「もっと普通にフジテレビにきたかった・・・」

リーダーの男が振り向き、ビィラを見た。

普段のおちやらけた雰囲気とは違ったビィラがそこに立っていた。

「その辺、見てきます・・・」

そう言ったあと、ビィラは銃を構えてその場をあとにした。

「ちっ! あいつ・・・」

リーダーの男は壁に手をついた。

「あの、リーダーさっきの話は・・・」

部下がリーダーの男にきいた。

「お前には関係ねえだろ！見張りしてこい」

リーダーの男はその部下を蹴った。

「うわっ！はいい」

何人かの部下が階段を駆け上がる。

「やばっ！西野、迎え撃つで」

「えっ！あっ、はっ？はいっ！？」

「怯ませるために足や手をねらうんやで」

「あっ、こうですかね？」

西野は一発、部下に放った

「うがっ！」

そして足にかすった。

「かすっただけでも、けっこうなダメージですね」

「すごいな！この銃」

西野と岡村は部下たちを次々と怯ませていった。

「なんて・・・やつらだ」

「リーダーに・・・申し訳ないっ」

「くそっ・・・」

部下たちが口々に呟く。

「うりゃあ！」

西野がポケットからかんしゃく玉をだしてなげた。

パ
パ
ー
パ
パ
ー
ン

「うおっ！」

部下たちが驚く。

「怯むな！ やつらは2人だ数なら勝てるぞ！ ！」

リーダーの男が叫んだ。

「こっちや！」

岡村は、でんき玉を投げ付けた。

「うあああああ!」

でんき玉はリーダーの男にあたって、その場にしゃがみ込んだ。

「くっ、こんなにやろ・・・」

痺れながらもリーダーの男は銃を構える。

「岡村さん！」

西野の手には吹き矢があつてそれをリーダーの男に向かってふいた。

「ぐあっ！！」

小さな矢は足にあたった。

その拍子にリーダーの男は前のめりにたおれた。

「よし！縛るでえ」

岡村と西野はポケットから縄をだして、怯んでいる部下やリーダーの男を縛り上げた。

「たしかまだ、いたような」

そのときリーダーの男が言った。

「ふん、まだ他に部下とビィラがフジテレビをうろついている！まだたくさん人数がいるぜ」

リーダーの男がにやりと笑った。

「うるさいわ、この！」

岡村がリーダーの男の腹を蹴った。

「どうします？」

西野が岡村にきいた。

「とりあえず、こいつら縛ったからな・・・まずは、人質の縄ほどこうか」

西野と岡村は人質の縄をほどいていった。

時間はかかったが、解放された人質たちはお互いに抱き合う者や、泣く者など、いろんな光景があった。

「ちっ・・・なんてやつだ」

リーダーの男は舌打ちをした。

「ビィラ！ いるか？ 捕まっちゃった！ 力をかしてくれおい！」

リーダーの男がビィラを呼んだ。

しかしビィラはリーダーの男の所になかなか駆け付けない。

「ちくしょう……他の部下も何してやがる……」

西野がリーダーの男に近寄った。

「なあ、ビィラってあんたの弟なんやろ？」

「はあ？」

リーダーの男が西野にすつとんきょうな声で言った。

「はあ？　じゃ、あらへんぞさっきの話きいたんやからな」

西野がリーダーの男に問う

「けっ・・・何も知らねえくせによ」

リーダーの男が呟いた。

「どういう意味や？」

「あいつは弟じゃねえよ」

リーダーの男が冷たく言った。

「でも俺たちが兄弟だったころって・・・」

岡村がおどろいて言った。

「あいつは俺のことを兄と思い込んでいる・・・だけどビィラは弟じゃねえ」

西野と岡村はこの言葉を疑った。

「ビィラは俺の両親が施設から、つれてきたんだ」

リーダーの男は語った。

「そしてビィラは俺や両親といううちに・・・俺のことをお兄ちゃんと言うようになった・・・俺は焦ったお前は施設からきたんだ、なんて言えねえだろ」

「じゃ・・・組織って何や」

岡村がリーダーの男に聞いた。

「母親がよ・・・男と一緒にどこか行っちゃったよ！浮気だよ！俺とビィラと父親を捨てやがった！」

リーダーの男は叫んだ。

「しかも後から調べたら、浮気した男はフジテレビの社員だった・・・」

・父親は女つくって母親みてえにどっか行っちゃまった！」

西野と岡村は戸惑った。

「それでも・・・俺とビィラに組織にはいんねえかってある人物に誘われたんだ」

「それで・・・組織に入ったのか」

「だれや？その人物って」

西野がリーダーの男に聞いた。

「さあな・・・フジテレビに入る前に電話したかな、お前らに教えるかよ」

リーダーの男はそう言った

「何やと！」

「西野！よせ」

西野を岡村が制した。

「そして俺は思った！母親と浮気した社員がいるフジテレビを占領してやろうとな！」

リーダーの男が力を込めて言った。

「ビィラはまだ俺たちが兄弟じゃねえこと、施設からきた子だということ、フジテレビを占領した目的・・・知らねえことがこんな・・・あいつにあるなんてな」

リーダーの男が震えていた

そのときだった。

「お兄ちゃん・・・」

リーダーの男が後ろを振り返った。

悲しげな表情をしている

ビィラがいたー

「ビィラ・・・!？」

「どういふことだよ・・・俺は施設からきたの？お母さんの浮気した人がフジテレビの社員って・・・そんなこと俺におしえてくれな

かったじゃないか！俺たちはお父さんがどっかに行ったあとでも・
・兄弟で力を合わせて頑張ってきただろ！！」

ビィラはそう叫んだ。

「もう、勘弁したれよ」

岡村が言った。

「お前ら！ そんなんで顔かくしやがって！ まだ俺たちに勝つと思っ
てんのか！」

西野が周りに向かって言った。

「ばれてるで！そのズボンに付いてる、しかくいやつで音声変えてんねやろ！でも俺にはわかるわ・・・まさか・・・お前やったとはな」

岡村はリーダーの男の覆面をつかんだ。

「なっ！やあめ・・・」

バアッ！

覆面がゆかにパサッ、とおちて周りがざわついた。

「うそ・・・やろっ・・・」

ただ呆然とする西野。

リーダーの男、そしてビィラとはだれなのか

次回

兄弟ではないことを知ったビィラ・・・

西野と岡村そして仲間達の

さらなる戦い！

兄の真実と弟の孤独（後書き）

話がだんだん深刻になっているのは気のせいでしょうか・・・

戦う事の意味（前書き）

物語もいよいよ中盤！

戦う事の意味

お兄ちゃんのが好きだった。

組織に入ってからテレビにでたりして仲間と一緒に仕事を頑張ってきた。

人前ではお兄ちゃんとよぶな、と言われた。

組織でいるとき以外、お兄ちゃんは俺を本名でよぶ。

俺とお兄ちゃんには仲間がいた。

アイドルグループとして活動していた。

「くっ・・・」

人質が驚いた。

そのリーダーの男は・・・

「大野・・・！」

西野はリーダーの男、いや大野をみて言った。

「じゃ！こいつはっ…ビィラは！」

西野がビィラの覆面をつかんだ。

「うわっ！何すんだよ」

ビィラが抵抗するも西野は覆面を脱がした。

「あっ・・・二宮!？」

ビィラとよばれていた男は二宮だった。

「くそっ・・・」

二宮は舌打ちをした。

「どごういふことや・・・お前ら」

岡村は驚いている。

「何で・・・説明しろよ！」

解放された人質たちのなかにいた櫻井が叫んだ。

「組織って何だよ！いつからはいったんだよ！！」

隣にいた松本が叫んだ。

「リーダー、ニノ！こんな事したって何にもならないってわかるよね？」

相葉がやさしく問う。

「うるさい！口だしするなやっところまで・・・頑張ったんだ」

大野が櫻井たちに向かって言った。

「おっ・・・リーダー」

二宮が大野を見ながら言った。

「組織に入って、幹部にまでなって・・・このフジテレビを占領することができた・・・」

大野は不適に笑った。

「俺の母親と浮気したフジテレビの社員！俺と・・・ニノを捨てやがった両親！この気持ち・・・お前らにわかるかよ・・・」

大野は人質たちを見ながら言った。

「施設から連れてきた、というより・・・施設の前に置かれてたんだよな・・・ニノは」

大野の言葉にビクツとした二宮。

「俺の母親がニノを拾い、俺の弟みたいにニノをそだてた・・・俺も何だかニノの兄ちゃんみたいになった・・・でも」

低い声で大野は言った。

「両親に捨てられてもニノは笑ってたんだよ・・・辛いくせに笑ってたんだよ！俺は不思議に思った・・・何で？どうしてそんな笑ってられるの？そう聞いたら・・・ニノは・・・ぐっ・・・」

大野は一筋の涙を流した。

「俺が悲しんでたら、お兄ちゃんも悲しくなっちゃうでしょ？だから笑ってるのお兄ちゃんも笑おうよ……ってな……」

大野は泣いた。

人質たちの前で。

櫻井たちの前で。

部下たちの前で。

岡村と西野の前で。

そしてー

二宮の前で。

前にたおれ、泣き声をあげる大野。

「リーダー……いやっ、智……」

二宮の言葉に反応した大野

「俺たちで頑張ろう……この状況を何とかするんだ」

二宮のつよい言葉に大野は言った。

「こんな・・・俺でも？」

「そんな智が頼もしいんだよ！」

二宮が大野に言った。

「何で！？なんでそうなんだよ！もうやめろよ！リーダー！ニノ！」

力の限り松本が叫ぶ。

「うるさい！俺とニノが、どれだけ辛い思いをしたか知らなかったくせに！！！」

その言葉に松本は何も言い返えせなかった。

というより、むしろ傷ついた。

ずっと、嵐の仲間としてすごしてきた。

なのに、そんな言い方をされた。

「そうだ・・・もう人質のなかに紛れこまなくてもいいんだぞ」

大野は、すくつと立ち上がった。

「なっ・・・」

岡村が大野を見た。

大野を縛ったはずの縄がすでに解かれていた。

「くそっ！いつのまに・・・」

西野がポケットから縄をとりだそうとした時だった。

「きゃー！」

「うわぁ！」

人質たちから悲鳴が聞こえた。

「おい！おとなしくしとけよ！まったく人質のふりすんの大変やっ
たわ！」

「まあ、そんな事言わんと」

2人の男が人質に銃を向けていた。

「石田・・・井上・・・」

岡村がその男たちを見た。

NON STYLEの石田と井上だった。

「なんで・・・お前らも大野たちの仲間やったんか？」

人質のなかにいた浜田が言った。

「だから？なんですか」

冷たく石田が言った。

「うそやろ・・・」

西野はただ石田と井上を見ていた。

そうしている間にも二宮とその部下たちは縄を解いていった。

「何でや！ちゃんと縛ったはずなのに・・・」

岡村が言った。

「俺らは組織の一員だぞ！このくらいの縄が解けなかったらどうかしてるっーの」

二宮が言った。

「こっちが有利になったぞ」

携帯を使ってフジテレビ内を見張りにあるいている部下をよびもどす大野。

そして

またもや状況が変わった。

人質のなかにいた大野の仲間の石田と井上。

また縄で縛られた人質たちと西野と岡村。

もどってきた部下と大野と二宮と人質にむけて叫ぶ部下たち。

「あかん・・・何とかせな」

宮川が言った。

大野は二宮を見た。

なにやら自信満々の表情をしていた。

勝てるー

そう思ったのだろうか。

でも俺にはわかる。

覆面をしていた時の二宮の表情が。

悲しいときや、ニヤリと笑ったときだって。

俺にはー

二宮を見ながら大野は思った。

「二ノ・・・そろそろ行こうか」

「えっ・・・もう？」

二宮は大野を見た。

「怖じけづいたのか？このフジテレビ占領計画の……メインイベントなんだぞ」

「何だよ……その例え方でも……そんなやり方でこの計画の幕をとじるって言うの？やっぱりだめだ！怖い……お兄ちゃ」

「お兄ちゃんじゃない！」

大野は二宮に向かって叫んだ。

「ほら、最上階に行くぞ」

「うん・・・」

二宮がエレベーターの前に行こうとした時だった。

「二ノ！セキュリティが始動してるから、エレベーター使えないぞ」

「えっ！ あっ、そうか・・・だからドアもあかないんだ」

ドアを見ながら二宮が言った。

報道陣やマスコミやらがまだ、入口の前にいた。

「ちょ！待てよ！！リーダー！ニノ！」

松本が叫ぶ。

だがその叫びは大野と二宮には届かない。

「くそっ！何か・・・方法この状況をどうにかする策はあらへんのか！？」

岡村が辺りを見る。

大野と二宮は階段で最上階へ向かっている。

しかしまだー

岡村と西野と人質たち以外にもー

まだー

隠れている人物がいたー

その人物は倉庫にいた。

「ちゃんと考えて行動しなきゃだめだな」

「言うねえ、さすが高学歴」

「俺達だってやればできるもんねえーうい」

「うるさいぞ！チャラ男」

何やら倉庫で話しをしている。

この話し声以外にもまだ人がいた。

数人の人物たちは人数をかぞえる。

「よし！そろそろ攻めるか」

「俺たちの強さ！敵に思い知らせてやるぜ」

「おーーーーー！！」

そしてその人物たちは倉庫をあとにした。

「おい！大変だ！！」

「何だ？」

「数人の奴らがきてんだよ！どういう事だ？まだ捕まえてないやつがいたなんてな・・・」

部下が騒ぎだしている。

「おらぁ！こんにゃろ！！」

何やら数人の男たちが鉄パイプを振り回して部下たちに攻撃していた。

「くそっ！くらえ」

部下の1人が男たちに銃を向けた。

「は〜い、させないよ」

銃を向けた部下の背中に蹴りをいれた。

「ぐわぁ!!」

蹴られた衝撃でたおれた部下を男がさつと縄で縛る。

「あっ! お前・・・」

男を見た岡村が言った。

「おっ、岡村さん！どうもでえゝす！」

その男はオリエンタルラジオの藤森だった。

「あっちゃん！そっちはどうだい？」

「なんとか縛ったぜ！」

藤森の相方・中田が部下たちを縛りながら言った。

「敵はまだこんなに・・・いるなんてな、はあっ」

ロザンの宇治原が鉄パイプを振り回しながら言った。

「それだけ敵も警戒してるってことだろう」

宇治原の相方・菅が銃を部下からとって、軽く乱射しながら言った。

「そんじゃ俺達は人質の縄をはずしにいくから！」

チュートリアルの徳井が藤森たちに言った。

「うい！任せたあ！！」

藤森が叫んだ。

「行くで！福田」

「おうっ！」

相方・福田が返事をして人質の縄を解く。

「福田、これ時間かかるで」

「人数多いからな・・・」

そのとき別の男たちが駆け付けた。

「俺達も手伝います！」

「お前ら・・・」

その男たちは、しずるの村上と池田、ジャルジャルの後藤と福德だった。

「頼りになるで！」

徳井が言った。

チュートリアル、しずる、ジャルジャルは人質たちの縄を解いていた。

「はあっ・・・」

「頑張りましょう・・・」

徳井たちが縄を解いてる間に藤森たちは部下を次々と縛っていった。

「くそっ！」

部下たちが悔しそうに言った。

その後、人質たちはまた解放された。

「ふっ、ばかにすんなよ」

1人の部下が呟いた。

そして、すさまじい数の部下が階段からおりてきた。

「うそやろ・・・！まだこんなに数がいなんて」

西野が驚いた。

「ふっ！まだこんなに居たとはなあ・・・俺達の力！思い知らせた
るわあー！」

岡村が叫んだ。

「しまった！このっ・・・」

藤森と戦っている井上が人質が解放されている事に気が付いた。

「井上！数やったらこっちが多いで！怯むなよ」

宇治原と戦っている石田が言った。

「みんな！行くでえー！！」

岡村が叫び前へと走る。

それに西野、人質たちが続いた。

岡村たちと部下たちがお互いに向かって走る。

かなりの人数がフジテレビのなかで戦っている。

「くそっ！ やっぱ敵が人数多いわ」

宮川が銃を乱射しながら言った。

「そうだ！西野、大野たちを追わんと」

「でもこの人だかりを、どうやって行けば・・・」

芸能人たちと部下たちが戦っているなかで岡村と西野は部下の攻撃を避けながら考えていた。

「ちくしょう！どないしたら・・・」

鉄パイプで応戦する西野。

そのときだった。

「西野!!」

岡村が叫ぶ。

部下が西野に向けて鉄パイプを振り下ろそうとしていた。

ガッ！

西野は後ろを振り向いた。

「さ、櫻井？」

櫻井が鉄パイプで部下の攻撃をうけとめていた。

「岡村さん！西野さん！リーダーと、ニノのところに行ってください！」

櫻井が言った。

「俺達で敵をたおしますから！援護します！！さあ」

松本が促した。

「リーダーを、ニノを……救ってください!!」

相葉が涙ながらに言った。

「お前ら・・・よし西野！」

「はい！岡村さん」

「行くでえーっ！」

2人同時に叫んだ。

そして走る。

岡村と西野をねらう部下を櫻井、松本、相葉が薙ぎたおす。

そして階段まで着いた。

一気に登る。

「大野・・・二宮・・・」

岡村と西野はただ最上階に向けて走って行った。

仲間を信じてー

次回

部下達と芸能人たち

大野と二宮の元へ走る岡村と西野

涙と衝撃のフジテレビ戦！

戦う事の意味（後書き）

岡村 「なあ！」

西野 「何ですか？」

岡村 「呼んだだけ」

西野 「あつ、そうですか」

岡村 「冷たっ！」

藤森「君かわういゝね！」

中田「こんな時にナンパすんな！」

兄弟じゃなくても俺らはずっと（前書き）

フィクションでも嵐が好きな方、すいませーん！

兄弟じゃなくても俺らはずっと

芸能人たちは戦っていた。

「リーダー……ニノ……」

櫻井が呟いた。

「翔ちゃん・・・今は戦いに集中しよう」

相葉が櫻井に言った。

「あつ、うん・・・しっかりしなきゃな」

そして再び戦い続けた。

大野と二宮は最上階へ向かっていた。

「ニノさ、今でも俺のことお兄ちゃんだって思ってるの？」

「えっ・・・でも・・・」

大野の言葉に二宮は戸惑う

「あつ、御免！俺はニノの兄ちゃんにいるとき・・・何かさ、お前から慕われてるって気分でさ」

「そりゃ・・・弟は兄を慕ったりするだろ・・・」

「そっか・・・あつ、ほら」

大野が前を指した。

「あそこの階段のぼったら最上階だから」

「へえ・・・そうなんだ」

そっけなく返事をした二宮

「みんなにちゃんと・・・別れを言えばよかったな」

「智・・・！いやだ、やっぱりだめ！怖い！」

大野の袖をつかむ二宮。

「あとは部下がちゃんとしてくれるから！なあ・・・」

そう言った大野だか涙をながしていた。

「何だよ！ 智だって怖がってるくせに・・・ひうつ」

二宮も涙をながしていた。

「大丈夫だ・・・お兄ちゃんが付いてる・・・」

「うつ、ひつく・・・お兄ちゃん」

大野と二宮は泣きながら最上階へ向かった。

「着いたね・
・
・」

最上階へと着いた大野と二宮。

「二ノ、こっち」

「ふえっ？．．．は．．．」

部屋の中にはいった大野と二宮。

「智？」

「どうだ！この景色は」

部屋にある窓を見る大野。

「うん、綺麗だね・・・」

二宮は一言そう呟いた。

「ふうっ・・・」

大野は窓をガラッとあけた

「二ノ? ほら」

二宮を呼ぶ大野。

「智・・・やっぱ怖い！」

部屋の隅にいる二宮を見ていた大野。

「じゃ、俺いくから」

「えっ!?! やだ! 置いてかないでよ!」

二宮は大野の元へ駆け寄った。

「二ノ．．．ずっと、お兄ちゃんじゃなくても．．．一緒にいてくれるか？」

「うんっ・・・弟じゃなくても・・・智は」

「あぁっ、ニノ・・・」

大野は二宮の肩を強くにぎった。

「い／＼・・・いくよ」

「うんっ・・・智」

2人は窓に足を掛けた。

そして大野と二宮が窓の外へ投げだされる寸前――

「わっ！何っ？」

「ひっ！ええっ？」

大野と二宮は何かにつられて部屋の中にもどされた。

「なんだよ・・・えっ」

大野と二宮の前には岡村と西野がいた。

「お前ら・・・今なにしようとしたんや？」

岡村が低い声で言った。

「何って・・・ニノと一緒にこっから・・・」

大野が小さい声で言った。

「下に降りようとしたんか」

西野が丁寧な言葉でそう言った。

「智! どうしたら・・・」

「ニノ・・・」

大野は岡村を見た。

「けっ！何だよ・・・」

「何だよ、じゃあらへんやろ！もうやめるんや」

岡村が大野に向かって言った。

「うるさい！フジテレビ占領計画は俺たちが幕をとじるんだよ」

「確かにだめだって・・・そう思った」

二宮が大野を見ながら言った。

「こんな幕のと同じ方・・・俺はだめだって思った、でも・・・」

「でも何や？」

西野が二宮に言った。

「お兄ちゃんと・・・智と離れない」

二宮のその言葉に岡村と西野は戸惑った。

「だからって・・・俺らはお前たちをほっとく訳にはいかんねん」

「うるさい！先輩だからっていい気になるなよ」

大野が岡村をにらんだ。

「二ノ、行くぞ」

「えっ！ちよっ
．．．」

二宮の手を引き、大野は窓へ向けた。

「ひっ・・・！あつ、智」

「二ノ・・・」

大野にしがみつく二宮。

そしてまた大野と二宮が外へ投げだされそうになる。

「大野！二宮！」

「あかん！！待つんや！」

岡村と西野が叫ぶ。

そのときだった。

「ひいやあああああ！ いやだ！！ 無理！ 智い！ 怖いよお！ うわあ
ん！！！」

二宮が喚いた。

「うわっ！ニノ！」

大野が二宮を支えた。

岡村と西野は大野と二宮を窓からはなした。

「はあっ・・・ひっ・・・」

二宮はその場に座り込む。

「ええ加減にせえよ！二宮こわがってるやろ！！」

大野に抱き着いて泣いている二宮。

「なっ・・・ニノ・・・」

「智・・・俺無理だよっ！こわい・・・」

二宮を見て大野は涙をながした。

「うつく．．．そうか．．．御免な二ノ．．．」

大野は二宮と泣いた。

「まったく・・・」

「ですね・・・」

岡村と西野はしばらく大野と二宮をそっとしておいたという。

次回

部下たちが反乱！

大野と二宮の意志

そして組織の全貌が明らかに！

兄弟じゃなくても俺らはずっと（後書き）

この戦いは伝説になる！ って感じ

一緒に立ち向かえる仲間がいるから（前書き）

更新おそくなりました（汗）

一緒に立ち向かえる仲間がいるから

「あれ？ニノたちじゃないか？」

松本が前を指して言った。

「ニノ！リーダー！！！」

相場が叫ぶ。

「リーダー？最上階に行ったのでは・・・」

部下が大野を見て言った。

「御免！この計画はやめた勝手かもしれないけど、やっぱりこんな事しちゃだめだとおもうんだよ」

大野が手を合わせて言った

「じゃ、何で俺たちをこの計画に誘ったんですか！」

1人の部下が叫ぶ。

「実はさ・・・俺の母親はフジテレビの社員と浮気して俺とニノを捨てた・・・兄でもない俺をニノは頼りにしてくれた・・・それで俺はフジテレビを占領する計画をたてた」

大野が部下に話をする。

「でも俺たちだけじゃ計画は無理だからお前たちを誘ったんだよ・・・協力してくれてありが・・・」

「はあ？」

NONSTYLEの石田が言った。

「俺たちを・・・要するに利用したんか？お前らのために？組織のためじゃなくて？」

「それは・・・ボスも・・・この計画に賛成してくれたし・・・」

二宮が言った。

「ふざけんなや！」

井上が叫ぶ。

「だよな！あーっ、やってらんねえ！！！」

「俺たち利用されてたのかよ！」

石田と井上の言葉に部下たちが次々に文句を言った。

「俺たちを利用したこと・・・後悔させたるわ」

石田がニヤリと笑いながら言った。

「そんな！ 智・・・どうしたら・・・」

二宮が大野の袖を握る。

「二宮、大野・・・」

岡村が二宮の肩を掴む。

「こうなったら・・・」

西野が大野の肩を掴む。

「戦うしかないやろ!!」

岡村と西野が同時に叫んだ

「岡村さん、西野さん・・・」

大野が二宮の手を握る。

「智・・・！？」

「二ノ・・・こうなったら戦うしかない・・・」

「何言ってるの？部下だよ？仲間だよ？」

「それは組織の中でだろう・・・もうこいつらは・・・そうじゃないんだ」

「・・・っ、智」

二宮が大野をじつと見る。

「それで、どないするんや？」

岡村が大野に聞いた。

「ここまできて戦わん訳にはいかんよなあ」

西野が二宮を見ながら言った。

「智・・」

「あ・・」

2人は西野と岡村を見る。

「戦います!!」

この声で芸能人たちから歓声があがった。

「みんな！聞いたか？よっしゃ、いくでえー！ー！！」

岡村の声で芸能人たちが走りだす。

部下も芸能人たちに向かって走る。

「第2ラウンドのはじまりやあ!!」

西野の声が限りなくひびいた。

「よくも俺たちを利用してくれたな！」

部下が大野に向かって叫んだ。

「智はそんな事してない！」

叫んだ部下に向かって二宮は鉄パイプを振りまわした

「俺たちは協力してもらったんだよ！あんたらに！だから利用なんかじゃない！」

「うるせえ！」

部下たちの反撃は凄まじい勢いだった。

「このままじゃあかん！何とかせな・・・」

岡村が周りを見た。

芸能人たちが徐々に疲れはじめていた。

「二氣に行くぞ！」

部下たちが一斉に総攻撃にでた。

「うわあああああ！！！」

芸能人たちが声を上げ地面にたおれた。

「何や！ あんたら、たいした事ないわ！ ふはっ！」

井上が笑った。

「せやなあ！ あはっ」

石田もそう言った。

「西野！」

「はい？」

岡村が西野を見て言った。

「俺たちだけで何とかするで」

「そんな！大勢でも勝てないのに・・・」

西野は弱気にそう言った。

「信じるんや！」

「岡村さん・・・」

お互いを見てそして頷く。

岡村と西野は部下たちの前にでた。

「何のつもりだ？」

部下の1人が言った。

そのときだった。

「えっ？」

地面にたおれていた芸能人たちが西野と岡村の背中を支えはじめた。

「見てみ！これが団結ってやつや！！」

岡村が叫ぶ。

「行くで！西野」

「はい！岡村さん」

西野と岡村が走りだした。

部下が岡村と西野に向かって走った。

岡村がポケットから何かをとりだした。

「これでもくらえや！」

部下たちに向けて岡村はでんき玉を投げた。

「ぐわあ！」

「しびれーる！」

岡村はどや顔をした。

「すごいな、岡村さん・・・俺も！」

西野は向かってくる部下に蹴りを一発入れた。

しかしその時だった。

ガン！

「ぐあっ!？」

西野が地面に頭を抑えながらたおれこんだ。

「西野!？」

「大丈夫ですよ・・・くそっ！」

西野はニヤリとわらった。

「俺にはこれがありますから・・・」

そう言う西野の手には・・・

大量のでんき玉。

「わっ！よせ・・・やっ・・・ぐえあー！！」

西野は部下たちに大量のでんき玉を投げた。

「岡村さん！こいつらを縛りますよ！」

「あっ・・・うん」

西野と岡村は弱った部下を縛りはじめた。

「何でこうなんねん・・・」

井上が舌打ちをした。

「こっちが聞きたいわ」

石田がそう言った。

そのあと警察がきて部下たちをつれて行った。

「そうだ・・・」

大野が警察の前で言った。

「みなさんに組織の事を話そうと思います」

「えっ!？」

西野が大野の言葉におどろいた。

「智! そんなことしたら組織に・・・」

「でも俺たちは組織をやめるんだから・・・なっ」

大野はやさしく二宮に言った。

「お前ら・・・」

西野がそう言った。

大野は組織がどのようなものなのか話した。

「智・・・」

二宮は怯えていた。

大野は芸能人たちや警察の前で組織の事を話している

もし芸能人たちの中に組織の者がいたら・・・

二宮はそう思っていた。

大野が話した事はこうだ。

組織は規模が広くてたくさん的人数がはいっているらしい。

そして組織のアジトが東京のどこかにあるという。

今回の計画は大野が自身で二宮と部下をつれてやった事だと語った。

しかしボスから指示を受けていた。

「さあ！行くぞ」

大野と二宮は警察に言われて後ろを向いた。

「リーダー！ニノ！」

櫻井が叫んだ。

「俺たち・・・待ってるからな！嵐としてまた活動できる日を・・・」

松本が涙ながらに言った。

「行かないでよーリーダー・・・ニノ！」

相葉はもう涙を流しながら言った。

「じゃ！またな・・・」

大野は二宮の手を握り警察とフジテレビを後にした。

「岡村さん・・・」

西野が岡村を見た。

泣いていた。

手で隠そうとしても涙が溢れていた。

「あかん・・・こんな事はもう・・・」

周りの芸能人たちからも泣き声がきこえてきた。

「岡村さん」

「何や？」

岡村が西野を見た。

「涙って・・・こんなに・・・でるもんなんですネ」

西野から涙が溢れていた。

それからー

「うわっ・・・目のした腫れちゃったな」

岡村がガラスを見ながら言った。

「岡村さん・・・どうします?」

西野がまえを指した。

戦いの後のフジテレビちらかっていた。

「うーん、みんなで掃除しよか」

「マジですか・・・」

芸能人たちの大規模な掃除がはじまった。

次回

掃除がすんだ芸能人たち。

岡村と西野は組織について調べるが・・・

はたしてその真相とは・
・
・

一緒に立ち向かえる仲間がいるから（後書き）

次回をおたのしみに！

楽屋での提案（前書き）

西野と岡村の会話の場面！

楽屋での提案

数ヶ月が経った。

「岡村さん、そろそろあの季節ですね」

西野が岡村に問い掛けた。

「何や、あの季節って？」

「毎年恒例のお台場合衆国ですよ！」

西野にそう言われ岡村は思いだした。

「もうそんな季節か」

「そうですよ・・・あれからけっこう経つんですね」

西野が言った。

「なんかわかったか？組織のこと」

「それが情報が全くないんですよ」

「やっぱりかく俺も調べよったんけどな、何一つ情報がないねん」

岡村の言葉に西野が提案した。

「じゃ、探しません？組織の奴ら」

「はあ？お前・・・何言って・・・」

「お台場合衆国で怪しい奴を見つけて組織の奴らか確かめるんですよ」

「あのなあ・・・簡単に言うけど、どんだけたくさん人がくると思
うてんねん」

「でも、しないよりはましですよ」

「うーむ・・・」

黙り込む岡村。

「わかった・・・できるだけ事はするか」

「ありがとうございます！そうだ！他の人たちにも協力してもらい
ましょう」

「おい！他の芸能人にも言う気か？待たんか西野！」

部屋をでて行った西野を追う岡村。

はたしてうまくいくのか・・・

次回

お台場合衆国の季節！

岡村と西野の作戦はどうなるのか・
・
・

楽屋での提案（後書き）

もうすぐ完結！かなあ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1591s/>

フジテレビレジェンド ～立ち向かえ！戦士達よ希望を賭けた戦い～

2011年10月8日15時29分発行